

虫めづる日本の人々

サントリー美術館（六本木）

23. 07. 22～09. 18



伊藤若冲 《菜蟲譜(部分)》1790（寛政2）年頃 重文 展示期間 8/9～9/18

日本美術の特色のひとつとして、古来より「草木花鳥」が大事にされてきたが、「虫」もまた重要なモチーフで、「蜘蛛、蛙、蛇」などのうごめく小さい生き物たちも「虫」として親しまれ、さまざまな美術作品に登場している。

江戸時代になると、「本草学」の進展や古画学習、俳諧などの文芸の影響を受けて「草虫図」という範疇に収まらない多彩な虫の絵が生み出されている。

本作品は唯一の着色の画卷で、巻頭から野菜類が並び、半ばから虫と小動物となり、巻末を再び野菜が締めくくるもので後半部に見どころが多い。



増山雪斎 《虫豸帖（ちゅうちじょう）・夏(部分)》19世紀 四帖のうち「夏」
喜多川歌麿 《画本虫撰(部分)》 1788年

江戸時代は「本草学」や書物に登場する動植物の名前を同定する「名物学」が流入した時代で、季節のうつろいを感じさせ、古くから詩や歌のモチーフとなった「虫」も研究対象になり、18世紀以降は飛躍的な進歩が見られて、「伊藤若冲」「酒井抱一」「喜多川歌麿」「葛飾北斎」などの絵師たちが、「虫」をモチーフとして数多くの作品を描いている。